

コロナ下で見えた パレスチナ人の「助け合い」精神

(特非) 日本国際ボランティアセンター パレスチナ事業
エルサレム事務所駐在員



山村 順子

イスラエルでは、3月後半に連日、路上でのお祭りが開催され、現在もカフェやレストラン、バーは毎日多くの人で溢れている。イスラエルにおけるワクチン接種率は、3月の4週目時点で国民の半分以上が2回目の接種を済ませており、すっかり新型コロナウイルス感染が終息したかのような開放的なムードで、路上でのマスク着用以外はすっかり新型コロナがやってくる以前の生活に戻っている。その一方で、パレスチナ自治区の雰囲気はそれとは少し異なる。政治的な理由からワクチンの接種がイスラエルに比べて大きく遅れており、2021年4月4日時点においても、やっと医療従事者やイスラエルで働く労働者、そして高齢者への接種が開始されたところである。今でこそイスラエルの様子を見た多くのパレスチナ人がワクチン接種を希望しているが、当初は皆、ワクチン接種に対して非常に懐疑的であった。「チップが埋め込まれていて、(イスラエル政府に)管理されるかも知れない」などという陰謀論が多く流れており、積極的に接種したいという意見はあまり多くなかった。こういった考えは、占領下で暮らす彼らが、イスラエル政府のやることすべてに不信感を持っていることからやってくるのである。



東エルサレム 人で溢れる旧市街のワクチン接種会場

パレスチナ自治区では度重なる都市封鎖により、人々は経済的にも精神的にもすっかり疲弊し、筆者のもとにも「失業して仕事を求めているので助けて欲しい」「なんとかあなたの団体で雇ってもらえないか」というパレスチナ人の依頼が増えた。また、家賃を払えず何カ月も滞納しているという者も多く存在する。もともと裕福でない人たちは日雇いなど不安定な職に就いていることが多いため、そういった人々がますます困窮している状態である。ラマッラー（パレスチナ自治区の経済の中心地）で働くところあるカフェの店員は、「店も新型コロナの影響でずっと閉まっていたから、何カ月も給料が支払われてないよ・・・」と嘆いていた。彼は困った挙句、自分の家賃を外国人の友人の協力を得て、クラウドファンディングで賄おうと試みていた。現在、パレスチナ自治区で最も開放的で活気がある都市ラマッラーにおいても、夜間の都市封鎖で夜7時にはレストランやバーが閉まる。それ以降は警察の目を盗んで罰金のリスクを冒しながら、こっそり営業する店があるくらいである（時期や都市によって多少状況は異なる）。



イスラエル 大勢の人で賑わう海沿いのバー

こうした窮屈な暮らしに疲れた人々の中には、「エリアC」と呼ばれるパレスチナ自治区でありながら、行政権・警察権をイスラエルが持つエリアに行き、パレスチナの規制を受けずに開いているレストランに行ったり、ハイキングなどのアウトドアを楽しんだり、様々な工夫をしながら息抜きをしている。少し自然のある場所に行ってみると、皆でバーベキューをしたり、水たばこを吸ったり、水浴びをしたり、ギターとともに大きな声でアラビア語の歌を歌ったり、窮屈な生活のストレスを晴らすかのようにパレスチナ人が思い思いに過ごしている様子を見ることができる。また、パレスチナ自治区で週末に厳しい移

動制限が課される際は、その前に移動制限のないパレスチナ自治区の他の都市に移動し、また平日になったら自分の街に戻る、そのために移動先の街で感染者が増加する、という現象も起こった。さらに、パレスチナ自治区が全体的に都市封鎖になっている際は、イスラエルナンバーの車の助けを借りて、通行許可証なしにこっそり検問所を超え、イスラエル側に忍び込むパレスチナ人もいた。



パレスチナ自治区 都市封鎖の期間、自然の中で仲間との時間を満喫するパレスチナ人

イスラエル人とパレスチナ人が暮らすエルサレムでは、普段からパレスチナ人からより多く罰金を取ろうとするイスラエル警察と、それに抵抗しようとするパレスチナ人の間で攻防が起きている。マスクをしていなかったり、移動制限中はその指定距離を超えた移動をしたりしていると、高額な罰金対象だが、その中でイスラエル警察が、規制違反をしていない者に対しても、「パレスチナ人」というだけで適当に理由をつけて罰金を課するというケースが多発していた。そのため、特にパレスチナ人はイスラエル警察が近くにきた際は、協力し合って罰金から逃れようとする。例えば、パレスチナ人同士の路上喧嘩が普段から多いオリブ山では、ある日、若者たちが流血するほど激しい喧嘩をしていたのにも拘わらず、遠くから来るイスラエル警察が見えた瞬間、その場にいた1人がマスクを調達・配布。全員が喧嘩を一時中断してマスクを付け乗り切った、という話があったほどである。想像すると何ともおかしな光景である。

家庭の様子はというと、コロナ下では母親たちに大きな負担がのしかかっている。子だくさんのパレスチナ自治区では、母親たちが何人もの子どものオンライン授業に付き添わなければ勉強しないのが実態である。また、子どもの数に対してパソコン・携帯の数が間

に合わない場合は、授業への出席を諦めるしかない。大家族で家の中にずっといなければいけないストレスに加え、子どもたちが外出できず抱えるストレスへの対応、夫の失業によってもたらされる経済不安など、もともとストレスの多い占領下の生活にこれらが加わるのだから、彼女たちの負担は相当なものであると察する。一方で、このコロナ下のオンライン学習において、前向きな面を見つける母親たちもいた。当団体が活動している、東エルサレム¹の保守的な地域に住む女性たちの数人から、オンライン授業について「自分の子どもの本当の学力レベルが分かった」「息子の方が優秀だと思い込んでいたが、客観的にクラスでの態度を見て、娘の方が学業において優秀であることが分かった」「新たなことを学べて、子どもよりも私の方が学ぶことに熱心かも知れない」と話していた。

いつもパレスチナ人女性たちと接していると、どんな困難な状況下でも自分にできることや、前向きな面を見て生き抜こうとする姿勢が感じ取れる。東エルサレムはイスラエルの規制でテイクアウト禁止となり、デリバリーのみ料理が注文可能だった時期に、女性たちがお菓子や料理のデリバリービジネスをインスタグラムで宣伝をする形で開始した。また、自治区・ラマッラーで夫が失業中の一児の母（20代女性）も、数カ月家賃が未払いの状況にも拘わらず、「これしかできないんだけど、一応サダカね！」と言って、家のベランダに来る鳥たちに質素な餌を用意していた。サダカとは、イスラームにおける、自由意思に基づいて行われる喜捨の一つである。自分たちが苦境にあっても、友人である私や毎日餌を食べにくる鳥のことを考えて行動している様子を見て、感心してしまった。

日本では「自粛警察」という言葉があるくらい、お互いを見張っていると聞いているが、パレスチナ人は大体がその逆であり、お互いに助け合ってこの危機を何とか乗り越えようとしている。決して良いとは言えないが、ワクチンがまだ出回っていないエリアでコロナ陽性者が生活のために平気で店先に立って仕事を続けていたり、禁止されていても驚くような大人数で結婚式を開催したりする様子を見ていると、「コロナや警察なんかに自分たちの生活を壊されてたまるか」という強い気概を感じる。日本人として見れば、ちょっとやり過ぎでは・・・と思うことが大半だが、人間らしさを大事にしているパレスチナ人らしくもある。新型コロナウイルスに感染したことを責められたり、感染者が謝罪する日本のニュースを見かけるたび、パレスチナ人と日本人の気質を足して二で割ることはできないものか・・・と思わずにはいられない。

(写真は全て筆者撮影)

1 エルサレムにおけるアラブ人居住区。当団体オフィスも東エルサレムにある。